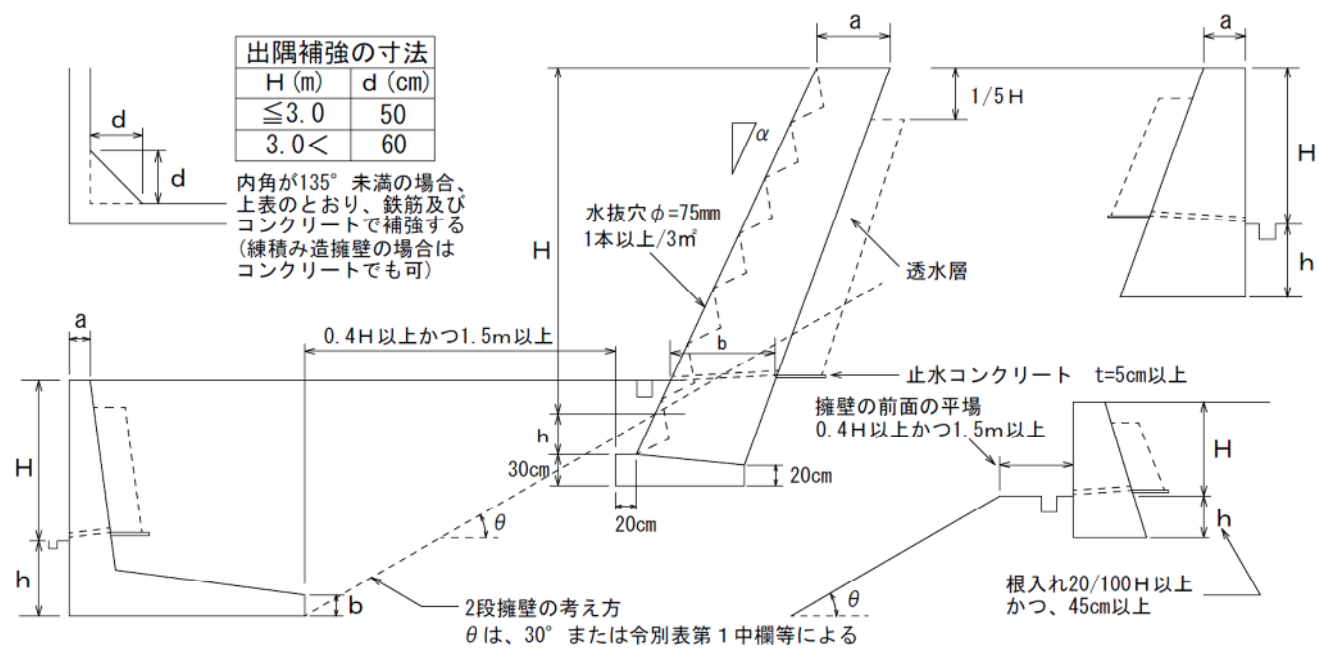


共通事項

1. 高さ (H) が 10m を超える擁壁は、原則として使用しない。使用する場合は、公的機関の審査を受ける。
2. 高さ (H) が 5m を超える擁壁は、地震時の安全性についても検討する。この場合、設計水平震度は 0.25 とし、安全率は滑動、転倒及び地盤の許容応力度に対して 1.0 以上とする。なお、設計に用いる地震時荷重は積載荷重を考慮した上で、地震時土圧又は常時土圧に地震時慣性力を加えた荷重のうち大きい方とする。
3. 土圧係数、摩擦係数、地盤の許容応力度は、現地の土質に応じた適正な値を用いる。粘着力は原則として考慮しない。
土圧係数は、砂質土の場合 0.4 を標準とし、最小値は原則として 0.35 とする。
摩擦係数 μ は、砂質土の場合 0.4 を標準とし、最大値は原則として 0.6 とする。
地盤の許容応力度は、原則として標準貫入試験等により算出する。
突起は原則として考慮しない。また、基礎杭は原則として使用しない。
4. 積載荷重は、10kN/m² を最低とし、実状に合わせて決定する。
5. 基礎地盤に傾斜がある場合でも、擁壁底盤は水平に設置する。
6. 根入れ深さは、高さ (H) の 20/100 以上とする。
その値が 45 cm に満たないときは 45 cm とする。また、1m を超えるときは 1m とすることができる。
7. 伸縮継目は擁壁長さ 20m 以内ごとくもしくは、高さが著しく変化する箇所等に設け、擁壁の基礎部分にも設ける。
また、出隅補強端部から 2m を超え、かつ擁壁の高さ以上離れた箇所に設ける。
8. L 型擁壁等の仮想背面における土圧の作用方向は、水平方向を原則とする。

構造別各種寸法



コンクリート造躯体寸法			
	H + h (m)	a (mm)	b (mm)
L 型等	< 2.0	150 ≤ a	200 ≤ b
	2.0 ≤	200 ≤ a	250 ≤ b
重力式	—	300 ≤ a	—
透水層寸法			
H (m)	上端幅 (mm)	下端幅 (mm)	
H ≤ 3.0	300	400	
3.0 < H ≤ 4.0	300	500	
4.0 < H	300	600	

- ・主筋の径はD13以上、ピッチは250mm以下。
- ・配力筋及び用心鉄筋の径はD10以上、ピッチは300mm以下。
- ・全高さ(H+h)が2m以上の擁壁は、ダブル配筋。
- ・土に接する部分の鉄筋のかぶり厚さは60mm以上、その他は40mm以上。
- ・主筋の定着長及び継手長は40d以上。

練 積 み 造 基 準 表 (最高5mまで)					
擁 壁			透 水 層		
勾配 (α)	H	a	b	上端幅	下端幅
75度以下 (0.27)	2.0m以下	70cm以上	85cm以上	30cm以上	40cm以上
	3.0 "		90 "		40 "
70度以下 (0.37)	2.0 "		75 "		
	3.0 "		85 "		50 "
	4.0 "		105 "		40 "
65度以下 (0.47)	2.0 "		70 "		
	3.0 "		80 "		50 "
	4.0 "		95 "		60 "
	5.0 "		120 "		

- ・胴込めコンクリートの4週圧縮強度は15N/mm²以上とする。
- ・組積材の控え長さは30cm以上とする。
- ・原則として、擁壁の上部に土羽を設けない。
- ・擁壁の上部に土羽がある場合の擁壁の高さ(H)は、擁壁高さに土羽高さを加えたものとする。(合計の最大は5mまで。)この場合、擁壁の上端厚さ(a)は、合計高さの比例配分により算出する。ただし、その他の寸法は、比例計算しない。